

「ウイズ生成 AI の時代を生きる」を読んで

以前講義の中で chatGPT を使ったことがあったが、とても便利だと思った。自分で考えなくても勝手に答えを出してくれるからだ。しかし、まだ完璧ではないので提案された答えの根拠になる部分や参考文献などは実際には世の中に存在しないものも含まれていた。つまり現時点ではまだ私たちは AI にすべての思考を任せることはできないということになる。生成 AI はあくまでインターネットの海から指示されたものに近い情報を持ってきてそれっぽくくつつけることしかできない。そのため最終的には私たち人間が真偽を見極め、判別することが必要である。この点は溝口先生と同じ意見だと思った。

将来的に生成 AI に多くの情報を学習させることでより正確で高度な会話ができるようになるかもしれない。でも、それは過去のことについてだけではないだろうか。AI ができるのは世に出ている情報から必要なものを集めてくることなので未来のこと、まだ人間も考えていないことを生成 AI が提案することはこの先もできないと思う。だから結局は人間が勉強して考えて人同士で対話を重ねていかないと学問は進展していかないのだと感じた。

この数年で AI できることは飛躍的に増え、文章だけでなく画像や動画もこちらが指示すればそれっぽいものをつくらせることができるようになった。私たち人間が生成 AI に任せられる部分を吟味しながら悪用せず社会にとって良い方につながるように利用できたらいいなと思った。

「クリスマスイブの霜柱」を読んで

私自身は研究室に配属されたばかりなので研究はしていないし、まだ今学んでいる学問の面白さには気づくことができていないけど、資料を読んできっかけは突然に来るものなのだなと思った。私も土壌物理学は数学と物理をずっと使っていくので試験を受けた時もこれをどうやって農業の現場で使っていくのか、仮に私たちが使えても農家さん達はわからないのではないのかと感じた。今思うとそれが溝口先生のおっしゃるような「現実離れ」と同じ感覚なのかもしれない。

講義室だけで学んでいると土壌物理学に限らず、構造力学も土質力学も水理学もどれも計算ばかりでこれが実際に起こっている事象であり、世の中で使われているものだという感覚が掴めないのだろう。早く実験がしたいなと思った。やはり、一方的に受け身になって学ぶのと自分から能動的に考えて試行錯誤して計算と現実が一致する場面を目の当たりにしないと学問の面白さはわからないのかもしれない。